

地域と農業

会報

第 65 号

Apr. 2007

Spring

三特集

日韓農業シンポジウム・富良野フォーラムの記録

第1報告 農村観光の形態と自然環境の重要度検証
特別報告 富良野市をモデルとした韓国安城市の地域づくり

札幌でのご宿泊なら
いつも安心・快適な

ホテルノースイン札幌
北農健保会館へ

1 冬割ツイン・和室プラン **素泊り**

一室2名以上のご利用で

お一人様 **¥2,500~**

2 Sルームプラン **限定10室**

バス・トイレ付のシングルルームでの
お泊まり 朝食付きのお得なプラン

¥5,000~

3 団体宿泊プラン **平日・日曜日限定、一括払い**

同一日に**10名以上**で宿泊すると冬季基本料金の**10%OFF**(2,250円~)、
さらに会議室を利用すると会議室料金を**30%OFF**

- ・ほかの割引制度との併用は不可。
- ・**団体宿泊プラン**は土曜日・祝祭日の前日及び当ホテルの指定日は除外日となります。
- ・**団体宿泊プラン**は宿泊ポイントの対象にはなりません。

期間 平成18年10月1日~19年5月31日

ホテルノースイン札幌
北農健保会館

〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目

電話ご予約 **011-261-3270** FAX **011-261-3298**

<http://www.hokunoukenpo.or.jp/kaikan/>

「喜び」を支える、喜び。

心から信頼しあえる人に出会えたこと。
大切に育てた花壇が、美しい花を咲かせたこと。
家族がみんな健やかに暮らしていること。
日々の生活にいそづく「喜び」は、人それぞれ。
そして、そんな喜びをさまざまな形で支えることが、
私たちの喜びです。

株式会社
ホクレン油機サービス

●本社/札幌市厚別区厚別中央1条5丁目1番10号
☎011(892)1551 FAX 011(891)1339

■函館支店 ■岩見沢支店 ■旭川支店 ■稚内支店 ■網走支店 ■東天北営業所 ■北見営業所

地域と農業

Vol .65

表紙写真：東神楽町
提供：山田 精一



目次

2

みる
観 察

団塊世代のひとりとして

(社)北海道地域農業研究所 専務理事 矢野 実

5

特 集

ミニ特集企画にあたって

北海道武蔵女子短期大学 准教授 松本 靖

日韓シンポジウム・富良野フォーラムの記録

第1報告「農村観光の形態と自然環境の重要度検証」

江原大学校農業資源経済学科 教授 申 孝重

特別報告「富良野市をモデルとした韓国安城市の地域づくり」

大韓民国 国立韓京大学校 総長 崔 一信

24

Essay

農業に魅せられて その1

養鶏農家（稚内市） 新田みゆき

29

レポート

「手習い」イギリス文化論 第7回

～アイルランド探訪～

北海道大学創成科学共同研究機構

明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門

博士研究員 小林 国之

39

連載No.48

あのマチこのムラ地域おこし活躍中
美唄市の事例

(社)北海道地域農業研究所 専任研究員 酒井 徹

45

お知らせ・掲示板・DATA FILE

観 察

団塊世代のひとりとして

(社) 北海道地域農業研究所 専務理事 矢野 実

今年から一斉に団塊世代が定年を迎えはじめるが、このことが原因で起こる諸問題が「二〇〇七年問題」と呼ばれている。とりわけ企業では、同世代が継承してきた高い技術水準をどうやって維持するかが大きな課題だ。そんなこともあつて最近テレビなどでも話題になることが多い団塊世代だが、「自立心・責任感に乏しい指示待ち世代」といった厳しい評価を一般的には受けている。かくいう私も一九四八年に千葉県船橋市で生まれた団塊世代のひとり。生まれついてこのかた、おおむね右肩上がりの日本経済下にあつて豊かで平穏な生活に明け暮れして来れた。しかしわれわれ団塊世代が大量に社会の第一線を退こうという今、国レベルでも厄介で大きな問題をかかえ込んでいる。近年の出生率の極端な低下もあつて、社会保障制度も破綻しそうな少子高齢化社会を迎えようとしているからだ。

団塊世代と歩む戦後農業

団塊世代が生まれた一九四七年から四九年は敗戦間もない頃で、深刻な食糧不足に見舞われていた。各地で農地の改良や開拓が進められ、一九五五年には米生産量が戦前水準に回復している。五七年には八郎潟干拓の大事業が始まるなど、五〇年代は国を挙げて食糧増産に取り組んでいた。

しかしその頃すでに、食料を海外に依存するという国づくりの骨格が作られている。

一九五〇年の朝鮮戦争勃発でアメリカは対日戦略を大きく変えている。同盟国日本の経済復興を目標としたアメリカは、小麦や脱脂粉乳など自国農畜産物を援助という名目で大量に日本に輸出

する。これら援助物資が全国の学校給食で用いられたが、アメリカへの食料依存は米飯中心のわが国の食習慣をも変化させることとなった。一方、朝鮮戦争特需後のあいつぐ大規模な工業育成政策は、一九五五―五七年の神武景気、一九五八―六一年の岩戸景気を呼びおこした。わが国の順調な経済復興は、まさにアメリカの思惑どおりの展開になった。

工業化による急激な経済発展は、農村の労働力と用地を必要とした。一九六一年に制定された農業基本法は、全農家の約三割にあたる相当規模以上の農家を専門的に育成し、生産性の高い日本農業実現をめざすものだった。一方では多くの小規模農家の労働力を他産業に移動させるといふ、工業・経済界の要請に沿うものでもあった。また同時期に打ち出された貿易為替自由化計画大綱は、工業化を後押しする自由化政策を基本としており、工業製品を輸出し農産物を輸入するという、その後の貿易スタイルを方向付けることとなった。

こうした政策に支えられた五〇年代半ばから七〇年代初めにかけての高度経済成長は、工業ほか他産業の大幅な賃金アップをもたらした。このため農村における新規学卒者や農業従事者など大量の労働力が他産業へ流出し、農業就業人口を急減させた。ところが農家戸数の減少には結びつかず、かえって兼業率の急激な増加をもたらした。結果として農業基本法の意図とは反対に、農業

の零細化と農業労働力の婦女子化・高齢化をもたらすことになった。

子供の頃の田園を航空写真にみる

私が生まれた年・一九四八年三月に米軍が撮影した船橋地域の航空写真を「国土地理院」のインターネット閲覧サービスで見ることができた。子供のころ遊び暮らした近所の空き地や原っぱ、小川や沼などが鮮明に写っているのど、とても懐かしく眺められる。この辺りは、かつて海だったという谷と台地が入り込んだ地形に特徴があるが、谷の中は水田が、台地の上には畑が広がっていた。谷と台地の境目は鬱蒼とした林で区切られており、その林に隣接して茅葺屋根の農家が小さな集落を作っていた。この航空写真にこれらの様子がはつきりと写っているとおり、当時の船橋は市街をすこし離れると田園そのものであった。

しかしこの地域も戦後政策により大変貌を遂げた。六〇年代はじめには海岸埋立地ばかりでなく田や畑にも用地が確保され、工業団地がつきつきと造成された。公営・民営の住宅団地や宅地の造成も相次ぎ、五〇年に十万人だった人口はその後の一〇年間で四倍に急増し、現在は六十万に近くになっている。住宅・工場・商業施設に無秩序に蚕食されて、わずかばかり残っている田や畑

の様子が、最近の航空写真や衛星写真で見ることができる。

戦後の工業化の波に飲み込まれ、零細・兼業化の道を行んだ農業・農村の典型をふるさと船橋に見る思いがする。しかし市の広報によると、北海道に次ぐ全国第二位の農業県・千葉県にあって、野菜・果樹を中心として一〇二億円(二〇〇四年)の産出を誇る県内有数の農業生産地と紹介されている。首都圏に巨大な人口を控えていることから、産直販売や体験農場なども盛んに行われており、自治体も都市型農業の維持・安定に取り組んでいるという。身近で安心できる農産物へのニーズばかりでなく、都市住民の間には清浄な空気や癒しの景観への関心が年々高まっているともいう。農と住がほどよく接近しているためにかえって良好な関係が作られているのだろうか。

負の遺産はこれ以上いらない

一方、北海道とその農業は、戦後の工業化のうねりとも無縁に欧米型農業を目指し規模拡大・専業化の道を行ってきた。いまでは豊かな穀倉・酪農地帯を形成し、わが国の食料を支える重要な役割を担うとともに、日本の食糧基地として確固たる地位を築いている。

ただ、このところWTOや日豪EPAなど貿易交渉の行方に揺

れている。交渉次第では、北海道のクリーンな農畜産物はもちろん欧州になぞらえられる独特な農業景観も失われることになりかねないからだ。このため農業交渉のダメージから農業と食料を守る懸命な取り組みが北海道では展開されている。しかし全国的には盛り上がりにはやや欠けるという。遠く離れた農業・農村のことなど、首都圏・大都市に住む多くの人たちには、あまり関係もないというのだろうか。

先ごろ、貿易交渉により輸入農畜産物の関税が撤廃されたら「食糧自給率十二％」になりかねないとの農水省の試算が報道された。経済繁栄の陰で翻弄されてきた戦後六〇年の農業を眺めてきた団塊世代のひとりとして、今こそ声高に言わなければならぬ。「必要な食料は安い海外から輸入すればいい」という道を行くのはそろそろ止めよう。少子高齢化に加えてさらにまた一つ負の遺産を子供たちに残すわけにはいかないのだから。





ミニ特集企画にあたって

北海道武蔵女子短期大学 准教授 松木 靖

この度、平成十八年八月に開催した、日韓農業シンポジウム・富良野フォーラムの記録を掲載させていただくことになりました。日韓農業シンポジウムと富良野フォーラム、そして北海道地域農業研究所との関係について、説明させていただきます。

日韓農業シンポジウムが始まったのは、平成六年のことです。第一回シンポジウムは

「ポスト・ウルグアイラウンドにおける日韓酪農業の展開方向」をテーマに、北海道農業研究会と韓国の江原大学校畜産大学（現江原大学校動物資源科学大学）の共催で、札幌市で行われました。翌七年には韓国江原道春川市で、第二回シンポジウムが「開放化・地方化時代に対応する地域農業の活性化戦略」をテーマに開催しました。以来、日本、韓国で交互に開催を続けています。

日韓シンポジウムには二つの目的があります。一つめは、グローバル化の中で、東アジア農業に共通する農業問題とその解決方向を探るといふものです。農業問題が日韓FTA交渉の焦点の一つであるように、日韓の農業には競争関係という側面があります。しかし、より視野を広げてみれば、稲作農業を基盤とする共通する農業構造を持ち、農産物輸出国から市場開放を迫られているという共通点が

あります。その共通点に立つて、相互理解と連携の道を探ることにしたのです。

二つめの目的は、第二回のテーマにあるように、韓国における地域農業研究の推進です。当時、韓国では実態調査に根ざした地域農業研究は、ほとんど手つかずの状態でした。江原大学校には、北大農学部など、日本に留学していた教員が多数在籍しています。彼らは日本での留学経験から、地域に応じた農業振興の必要性を感じていました。日本側主催者の北海道農業研究会は、実態調査を基盤とした実証主義に立つて、北海道農業を研究し北海道農業の発展に寄与することを目的とする研究会です。日本側の経験を交流することで、韓国の地域農業振興を進めようという考えがありました。

北海道地域農業研究所には、設立以来、日本開催の後援をお願いしてきました。地域農業振興を目的とする、研究所の存在は韓国の地域農業研究に大いに刺激を与えました。北海道地域農業研究所をモデルに、江原道の農業団体、行政、大学をメンバーとする産官学連携組織として、江原道農漁村研究所が設立されたのです。

シンポジウムは昨年で十三回目を数えました。昨年の第十三回日韓農業シンポジウムは、「日韓における農村開発の新展開」をテーマに、平成十八年八月二四日から二六日まで開催されました。二四日に札幌市でシンポジウムを行った後、二五日に富良野・美瑛地域の視察をし、二六日に富良野フォーラムを開催しました。

富良野フォーラムは

北大農学部と富良野市の交流協定記念として行われたものです。平成十七年十二月に北大農学研究院と富良野市は、農学関連技術の発展、農村資源の活用、地域の持続的発展、人材交流と人材育成、生涯学習などの包括連携協定を結びました。この大学と地域の新たな連携のあり方を模索する取り組みの一貫として、フォーラムを実施しました。フォーラムでは、地域に即した具体的な討論を行うために、全国有数の観光地である富良野の特性を踏まえ、観光開発のあり方をテーマにしています。

今年の日韓農業シンポジウムは、八月に韓国で開催する予定です。



日韓農業シンポジウム ・富良野フォーラムの記録

第1報告 農村観光の形態と自然環境の重要度検証

江原大学校農業資源経済学科 教授 申 孝重

はじめに

農産物市場の開放化と共に、農業と農村には危機意識が高まってきたおり、これを打開するための多様な政策が樹立されています。

その中の一つが農村観光です。

農村観光とは農業に関連する観光を含めて農村地域で行われるすべての観光を指しております。すなわち、農村に存在している多様な資源を利用することや生産される産物を利用して農村から観光の形態として形成されたものを農村観光と定義します。その中の代表



的な形態が「地域の祭り」であります。

最近、それぞれの地方自治体は地域経済を活性化させるための方法の一環として地域文化を特性化して地域のアイデンティティを確立し、これを通じて観光客を誘致するなど、「地域の祭り」の観光商品化のための取り組みを活発に展開しています。多様な「地域の祭り」は地域が持っている景観と特産物を活かし、テーマのある観光商品として発展する原動力となる可能性を持っています。

経済発展による所得増大と週休二日制の実現による余暇時間の拡

大が観光需要を牽引しています。祭りや文化行事を通じて外部観光客を地域に誘引することで観光収入を拡大させようとする自治体の希望が各種文化行事の供給（開催）を保証しており、結果として、需要と供給の双方の要因が地域祭り市場に存在しているというわけです。

全国的に各地域の代表的な特産物や地域のイメージなどを考慮する多様な祭りが存在する中で、どのような形態の「地域の祭り」が地域の農業関連経済にプラスの影響を与えているかは今後の「地域の祭り」関連政策樹立にあたって重要な指標になると考えられます。祭りが自治体別で盛んに行われている現実において、「地域の祭り」がどの位の経済的效果を持っているのかを調べることは、祭り開催に投入される莫大な費用を考慮する場合に大きな意味があると考えられます。

「地域の祭り」によって、その地域にもたらされる経済的、社会的な効用が大きいことから、祭りの重要性がより大きくなっており、これに対する正確な分析と評価に関する研究が必要となっています。したがって、本研究は江原道の華川で開催されている地域特産物と自然環境を目玉とした「地域の祭り」を主題にしています。二つの「地域祭り」への訪問者を対象にして、主題別満足度による地域特産物に対する購入意向と購入意思額を比較分析して、地域祭りに対する満足度向上と地域特産物需要増大のための経済的指標を提供す

るのが目的であります。

具体的には、華川郡の「水（河川）」に関する観光を関連主題とする祭り（丸木船祭り）」と地域特産物が主題である「トマト祭り」の訪問者を対象として、任意標本によるアンケート調査を実施しました。アンケート調査を実施するにあたっては、地域の自然概況及び特産農産物をより正確に把握するために、既存統計資料の分析と検証を行い、これらをもとにアンケートを作成して祭りの期間中に配布し、同時に現場でのインタビュー調査も実施しました。

分析の方法は、潜在需要層の形態および選好度、経済性の分析を実施するために顕示選好理論にもとつた旅行費用平価法（*Revealed Cost Method*、*TCM*）を基礎としながら、地域特産農産物購入意向額数（*WTP*）を追加したものです。

アンケート内容は大別すると四つに区分され、第一に華川を訪問するようになった動機及び華川に対するイメージと訪問満足度、第二に、項目別で詳細に費用を記述させ詳細算出を可能にして旅行費用を導出すること、第三には、購入意向、購入動機、購入品目を調査して華川特産物に対する訪問者の意識及び選好度の調査をしました。第四に、訪問者の一般的なフェイズ事項である性別、所得水準、年齢、学歴などとなっています。

1 地域特産物需要の実態分析

訪問者の社会経済的な性格

ソウル首都圏地域からの訪問者の割合は、「丸木船祭り」で六三・八%、「トマト祭り」では六五・六%と非常に高い割合を示しています。華川を訪問した動機は、祭り及び関連プログラムに最も高く現れています。が、「丸木船祭り」の場合四一・二%、「トマト祭り」は五〇・二%の割合を示しています。また、華川の自然環境及び景観による訪問動機も、それぞれ二四・三三%、三一・二%となっています。

華川の自然環境に対する満足度をみた場合、二つの祭りの訪問者は皆良い評価を示しています。「丸木船祭り」訪問者の満足度が「トマト祭り」訪問者よりその数値は少し高く現われています（表1）。祭りに対する満足度は、自然環境満足度に比べてやや低くなっていますが、二つの祭りが同じ時期に開催されることから、「丸木船祭り」参加者の満足度が、「トマト祭り」参加者の満足度より高くなっていることは注目されます。

次に年齢層をみてみますと、「丸木船祭り」の場合、全体訪問者

表1 祭り訪問者の満足度

		単位：%	
評価		丸木船祭り	トマト祭り
自然環境満足度	非常に良い	75.2	71.9
	少し良い	19.1	19.0
	普通	5.5	8.0
	評価(5点満点)	4.7	4.6
祭りの満足度	非常に良い	58.7	50.3
	少し良い	29.6	28.7
	普通	10.1	18.0
	評価(5点満点)	4.5	4.3

表2 訪問者の年齢階層

単位：%		
年齢階層	丸木船祭り	トマト祭り
20才代	11.8	11.4
30才代	53.3	59.9
40才代	25.4	24.5
その他	9.5	4.2

の七八・七%、「トマト祭り」は八四・四%が三〇～四〇代の訪問者で、一般的に幼い子供がいる年齢層で大部分が占められています(表2)。家族を伴った割合が、「丸木船祭り」の場合六一・四%、「トマト祭り」では六四・一%となっており、二つの祭りとも家族連れを中心に参加していることを分かります。

祭り訪問者の教育水準を見ると、高校卒業以上が「丸木船祭り」で全体の九六・二%、「トマト祭り」では九七・六%で、大部分の訪問者の教育水準が高いことがうかがえます。

一般的に教育水準と高い相関関係を持っている年平均所得をみた場合、「トマト祭り」参加者の年平均所得は四、一五〇万ウォン、「丸木船祭り」は三、八三五万ウォンとなっています。このことから主に中産階級が多く参加する祭りであることが推測されます(表3)。

しかし、祭り訪問者が華川訪問のために用意した予算は、「丸木船祭り」の場合一人当たり約三一・四千ウォン、「トマト祭り」は四三・八千ウォンとなっていますが、実際に掛かった費用は前者の場合二五・〇千ウォン、後者の場合は二八・六千ウォンとなっています(表4)。

一方、祭り訪問の時、不便に感じたり、改善を要する事項として、二つの祭りともに駐車場問題が一番高く現われています。次に食事、宿泊、移動手段および衛生問題なども挙げられています。しかし、華川を再び訪れたいと希望する割合は、「丸木船祭り」で九七・六%、「トマト祭り」では九五・八%と高くなっています。

地域特産物の購入傾向

つぎに訪問者が地域特産物を購入したか、または購入する意向あったかどうかを質問してみました。その結果、「丸木船祭り」と「トマト祭り」での反応は反対に現われました(表5)。

「トマト祭り」は、地域特産物を素材にした祭りのため、高い購入

表3 訪問者の所得階層

単位：%

所得階層	丸木船祭り	トマト祭り
1,000～3,000万ウォン	38.6	34.1
3,000～5,000万ウォン	42.6	44.3
平均所得(万ウォン)	3,835	4,150

表4 一人当たり予算と費用

単位：ウォン

	丸木船祭り	トマト祭り
予算(A)	31,366	43,832
支出(B)	24,974	28,585
差(A-B)	6,392	15,247

表5 地域特産物の購入意向

単位：%

購入意向	丸木船祭り	トマト祭り
あり	37.3	70.1
なし	62.7	29.9

意向が示され、「丸木船祭り」は、地域の代表的な自然環境を素材にした祭りであることから、訪問者の祭りへの参加意図の違いを反映した結果が出てきました。また、購入を希望する特産物の生産方式(農法)としては、両祭り共に、有機農法、自然農法や無農薬・無肥料栽培に関心があり、それらの農法を好む割合は九五%以上となっています。

平均購入の予算をどのように考えているかみてみました。「丸木船祭り」の場合、「10,000～30,000万ウォン未満」が

10.0%、「30,000～50,000万ウォン未満」が9.3%、「10,000ウォン以下」が5.4%、「50,000～100,000ウォン」が4.3%の順序でした。そして「購入予算がない」が69.2%でした。購入意向がある回答者の中で三四.7%が購入予定金額がないことが注目されます。「トマト祭り」の訪問者の場合、平均購入(予定)金額は約一七、二四六ウォン(二〇〇年度基準)となり、これを他の地域の特産物関連祭り(例えば利川の陶磁器祭り)の二一、七三九ウォン(二〇〇〇年度基準)と比べると約四、五〇〇ウォン下回っており、生鮮品で貯蔵性が低く絶対的に低い価格にある華川のトマトが、全国的に知名度がある他の地域の製造分野の特産物より「祭り」を通じて競争力を持っていることが分かりました。

特産物の購入意向がない理由は、二つの祭り共に「地域特産物に対する情報の不在・不足」があげられています。これは祭り訪問者を対象にした地域特産物に対する広報がよくできていないためと考えられます。その次は、他の地域特産物との差がないから購入する意向がないという回答です。

一方、華川の地域特産物を「今後の購入する意思金額」を質問した結果、「丸木船祭り」訪問者の場合、毎月「10,000～30,000万ウォン未満程度」に購入する意向のある回答者が三六.5%占めていました。また「30,000～50,000万ウォン未

満」と「五〇、〇〇〇ウォン以上」がそれぞれ三〇・八％、二〇・一％となっています。「トマト祭り」訪問者の場合は、「一〇、〇〇〇～三〇、〇〇〇ウォン未満」が四四、九％を占めています。また、「三〇、〇〇〇～五〇、〇〇〇ウォン未満」が二六・三％、「五〇、〇〇〇ウォン以上」が十二、六％となっております。

2 推定結果

つぎに地域特産物の購入行動を調べるために地域特産物の購入意向金額を従属変数にした需要曲線を導出し、主要変数との関係を推定した後、地域特産物販売の目標値を算出して、TCMを利用して算出した華川からの実際に支出した費用と主要変数との弾力性を導出して地域の自然環境と祭りの満足度による関係を分析しました。

地域特産物購入行動推定結果

「丸木船祭り」の場合、改善事項の要望が多いほど、華川の特産物の購入意向金額が低い傾向をみせていることがわかりました。「トマト祭り」の場合は、改善事項の要望が多く、所得が高いほど、華川の農産物の購入意向金額は低いことを示しています。

一方、祭りによって実際に地域の特産物を購入した費用と、今後の購入する金額とは差があることが現われています(表6)。すな

表6 地域特産物の実際購入額と購入意向額

単位：ウォン

	トマト祭り	丸木船祭り
地域特産物の実際購入額	6,006.1	2,704.6
今後の購入意向額	15,900.8	18,415.7

わち、実際に支出した金額は、「トマト祭り」と「丸木船祭り」を比較すると、約二・二倍の差が出ています。また、今後の購入意向額は「トマト祭り」が「丸木船祭り」より少なくなっています。これは「トマト祭り」の場合、地域特産物をテーマにした祭りのため、現場での支出が相対的に高く発生したことを示しています。自然環境をテーマにした「丸木船祭り」訪問者の地域特産物に対する購入意向金額が非常に高く競争力を持つていることを示しています。華川の美しい自然環境のイメージと連携させたことが「トマト祭り」より高く現われた要因と考えられます。

つぎに華川の自然環境満足度と訪問満足度について、華川農産物購入意向曲線を用いてみましょう。「トマト祭り」の場合は、平均購入意向金額(一五、九〇〇・八ウォン)を代入した場合、算出された満足度は三〇・三となります。しかし、標本の平均自然環境満足度(四・六)と平均華川訪問満足度(四・三)を代入した場合の購入意向金額は、それぞれ二一、八六七ウォンと八、〇四一ウォンとなっています。一方、実際に支出した一人当りの華川特産物の購入金額は、平均六、〇〇六・一ウォンとなつ

ていますが、これは前に導出された訪問満足度の三・〇三によって算出された六、一一二ウォンとほとんど類似した数値であります。

したがって、平均訪問満足度(四・三)と平均自然環境満足度(四・六)の需要曲線による平均一人当りの購入意向金額である二〇、九〇〇ウォン(二一、八六七ウォンは、地域の農業関係者が目標にしなければならぬ数値だと言えます)。

しかし、「丸木船祭り」の場合は、トマト祭りの場合とは違う結果が導出されました。平均自然環境満足度(四・七)を考慮した場合の購入意向金額は、四、二四八・二ウォンと算出されて、平均購入意向金額である一八、四一五・七ウォンとは、大きな差(約一四四六七ウォン)を見せています。また、逆に平均自然環境満足度(四・七)を考慮した場合の満足度指数は八一九・四となり、満足度最高点数である五点の範囲を大幅に離れて理論的に説明するには不可能となります。これは現実的に平均自然環境満足度と平均購入意向金額が存在するため、二つの解釈ができるからだと考えられます。

解釈の一つは、華川の自然環境の与える満足度が、アンケートで設定した満足度の範囲を大幅に超える位の満足度を示していることです。一四、一六七ウォンの差は、広義の利用価値であり、同時に保全価値である選択価値(option value)の概念として解釈することができま。すなわち、現在の自然環境を保全するための対価と

して、その差額を一種の保険料(risk premium)で支払う意向があることを示していると解釈できます。もう一つの解釈は、モデル推定のミスも想定できませんが、統計的な指標に問題点がないため、他の形態の推定方法やモデルの適用も検討すべきかもしれません。

弾力性の推定値の比較

つぎに弾力性の推定値の比較をしてみましょう。旅行費用モデルを利用してテーマ別に祭り訪問者たちが華川で実際に支出した旅行費用(THC)と主要変数の間の弾力性の推定値を比べた結果を表7に示しました。

THCとの弾力性の推定値は、二つの祭りで自然環境満足度(弾力的)と改善事項項目数変数(非弾力的)が同じ傾向を見せていることです。残りの変数は、反対の傾向を見せています。特に、祭り満足度変数の場合、THCに対して「トマト祭り」では非常に弾力的であり、「丸木船祭り」では非弾力的となっています。これは「トマト祭り」が自然環境を対象にしたのではなく、特定農産物を対象にした祭りであることに起因しており、祭りに対する満足度が華川を訪問する旅行費用を増加させることに非常に大きな役割を果たしていると解釈することができます。

地域特産物の購入意向金額(WTP)と主要変数の間の弾力性を分析してみると、特定農産物を対象にした「トマト祭り」の場合

表7 旅行費用に対する弾力性の推定値

	トマト祭り	丸木船祭り
華川自然環境に対する満足度	3.0	1.3
祭りの満足度	2.0	-0.4
改善事項の個数	0.1	0.0
アンケート応答者の年齢	5.2	0.5
教育程度	4.7	-0.0

表8 地域特産物の購入意向金額に対する弾力性の推定値

	トマト祭り	丸木船祭り
華川自然環境に対する満足度	0.6	2.0
祭りの満足度	0.5	0.4
改善事項の個数	0.0	0.0
アンケート応答者の年齢(年)	3.2	1.6
教育程度(年)	-1.7	0.3

は満足度変数との関係は非弾力的となっており、「丸木船祭り」の場合は自然環境満足度変数に対してはもっと弾力的となっています(表8)。

これはTHC場合と同じで、「丸木船祭り」は地域の自然環境をテーマにしたので、祭りの満足度とは関係なしに自然環境の良、不良によって、地域農産物を購入する度合いに大きな差異があることを意味しています。すなわち、祭りに参加する訪問者が、自然環境

が良いと評価する場合は、地域特産物を購入しようとする傾向は高くなるはずだと言えるのです。一方、改善項目数の変数はTHC場合と同じように、非常に非弾力的に現われて地域特産物購入と祭りでの不便及び改善事項は関係が非常に微弱であると解釈することができます。

結論として自然環境をテーマにした「丸木船祭り」の場合は、自然環境に対する満足度変数がTHCとWTP双方に対して弾力的となること。一方、地域特産物をテーマにした「トマト祭り」の場合は、祭り満足度変数がTHCに対しては弾力的ではないが、WTPに対しては非弾力的なことが分かりました。したがって、地域特産物を購入する傾向は、祭りが持つ性格によって大きな影響を受けると考えられるのです。

3 結論

以上で見ましたように、祭りの性格により地域特産物に対する購入意思は確実に差があることが明らかになりました。すなわち、地域特産物をテーマにした場合、訪問者は祭り現場での購入額が高くなっていますが、今後の購入意思は低いことが示されました。一方、地域の自然環境イメージをテーマにした場合、訪問者はその反対の傾向を持っているのです。言い換えれば、祭りへの参加とは関わら

ずに消費者が好む方式で地域特産物を生産すると購入する意思を持つ訪問者の平均購入意思金額は、「丸木船祭り」訪問者が「トマト祭り」訪問者より高くなっています。

「丸木船祭り」の場合、参加目的は自然環境を楽しむことでも、地域特産物に対するネーム・バリューが高まることにつながることを意味すると考えられます。「トマト祭り」の場合は、地域特産物が主になるので、相対的に自然環境を楽しんで満足感を感じることができる機会が少なく、その反対の結果になったと考えられます。

満足度による地域特産物需要曲線を通じて現われた結果と、旅行費用モデルを通じて現われた結果を比べると、共に導き出されたことは、地域自然環境に対する満足度が地域特産物購入金額及び今後の購入意向額、そして旅行費用を増加させる最大の要因であることであります。

このことは多様な形態の農村観光を通じて自然環境を保全するということが、農村地域の持続可能な発展をさせることのできる政策的代案になることを意味しています。したがって、地域の祭りを通じて地域特産物に対する需要を増加させることで、地域発展を図るうとするならば、祭りと農産物関連政策には、自然環境の質が必ず反映されなければならず、統合的な農村発展政策として考えなければならぬことを意味しております。

どうもご静聴ありがとうございました。



特別報告 富良野市をモデルとした韓国安城市の地域づくり

大韓民国 国立韓京大学校 総長 崔 一信



はじめに

今日のテーマは農村の環境を活かした話です。私共の大学の名前を日本語で言う「韓京（かんきょう）」と言います。総長になって大学をどのような方向に持っていくかと考えた時に農業環境について考えていこうと思いました。偶然にも大学名（韓京）を日本語で読むと「環境」となりました。

まず大学の紹介をしましょう。韓京大学には、現在七、〇〇〇人の学生がおります。一九三九年に農業大学として創設されました。現在では三学部二九学科あります。大学はソウル首都圏の南に七〇kmの所に位置しています。周辺地域は農業地帯で、主要作物はコメ（水稲）、ぶどう生産、韓牛飼養などです。

1 富良野をモデルとした地域づくり

安城市の地域づくり事業の参考として何故、富良野をモデルにしたか、その背景を申ししましょう。私は一九八二年から一九九四年まで北海道に留学し勉強をしていました。留学中に富良野の話は聞いたことがありましたが、一度も訪れたことはありませんでした。それは富良野以外に綺麗な風景のところが沢山あったためと言うこともありますが、ただ訪れる機会がなかったということが本当のところだと思います。

しかし、今から八年前ぐらいに富良野市で酪農を営んでいる三好さんと出会う機会があり、その後交流を持ち始めたとききっかけとなり何度も富良野に訪れるようになりました。初めて富良野を訪れた時の第一印象は、「美しいところだ」と思い、その美しさを多くの方々に見せたくて、その後毎年のように大学における社会教育の一環で韓国の農村婦人を連れてきており、この企画はもう既に六、七年も続いております。

訪れる度に、富良野のような街づくりを韓国でも実施してみたいと思うようになりました。そのような背景から韓京大学総長になった現在、大学の新しい事業を行うにあたり、「環境にやさしい街づくり」を行ってみようと考えようになったのです。

2 事業の概要

この事業の背景としては、以下のようなことがあげられます。①一次産業としての農業の成長に限界、②地域発展の新たな成長動力（誘因）の必要性、③社会と経済発展に伴う「Well Being」需要の増加というものがあります。

この中で「成長動力（誘因）」という言葉は、現在IT関係など先端産業の技術が成長を牽引している、ということにあてはまりません。人間の生活水準を高めるために、このような牽引する産業が重要であると考えます。それからもう一つは韓国全体の生活水準が高まったことで「Well Being」という考え方が持たれ始めています。その結果、高価格でも安全で安心な農産物が求められるようになりまし。従来の韓国農業における「生産する」だけから「付加価値を高める農業」へ転換しようと考えられるようになり、富良野市の取り組みが大いに参考となっています。

3 事業の目的

つぎに事業の目的として、以下のようなことがあげられます。まず「生命産業としての新たな農業体系の構築」です。これは、農畜

産物の流通体系を原料生産・出荷型から加工・販売型に移行させ、付加価値を高めた特産品を創出し、新しい農業のあり方を提案することです。

そして「学、官、民のクラスターによる地域開発体系の構築」であります。地域農業の発展モデルの体系化に相互協力し、環境保全と地場資源を利用した未来型農業モデルを構築することです。

最後に「農村観光の活性化による地域農産物の付加価値の創出」があります。新たな農村観光産業の基盤を造成し、地場産の特産品の流通と販売量の拡大を目指すことです。このような目的は、富良野市を見ると当たり前のようですが、韓国においては現状のままでは相当に困難で、実現のためには高い社会レベルとノウハウが必要であると思います。

また大学における問題もあります。日本と同様に韓国の大学でも法人化が検討されており、今後の大学のあり方をどのようにしていくかということも考えていかなければなりません。つまり、大学が社会に認められるような仕事をしなければならぬということです。そのためには大学が街づくりに関わっていくべきと考えています。もちろん街づくりは、行政などが主体となって行うべきなのでしょうが、大学がその中心となって行うことがこの事業の重要なところだと思います。

ところで富良野に目を転じてみますと、一年間に富良野市を訪れ

る観光客が二〇〇万人であると聞いております。その中で、ラベンダー畑で有名な富田ファームにおいて得られる年間観光収益は八〇億円ほどあるそうです。富良野市の人口は二万五千人以上ですが、安城市の人口は一六万人です。隣の市が三六万人で、さらに隣の市は七〇万人もいます。さらに首都圏には二、〇〇〇万人の人口が集中しております。このように比較してみますとこれだけ多くの人口が集中しているところで、富良野のような街づくりをしないでよくことは問題です。

昨年韓国においても週休二日制が実施されております。現在週末の金曜日にソウルへ出かけようとしたら最低でも三時間はかかります。渋滞を引き起こしてもソウルの街へ遊びに行く人が増えています。また土曜日にはどこかに出かけなくてはならないというような生活スタイルも定着しつつあります。

このような人口、地理的条件や生活スタイルの変化が起こっていることから、富良野市のように二〇〇万人の観光客を呼びよせることは容易で、安城市ではそれ以上の観光客を呼び寄せることができているのではないかと考えております。

4 「親環境」的な地域特性

また、これらの背景の他、事業の要件として次のようなことがあ

げられます。安城市の「親環境」的な地域特性を活用することです。例えば、ソウル首都圏に位置しており農村景観や地場資源の豊富な地域であることです。さらに現存する安城市の農業基盤を利用することもあります。これは畜産、果樹など国内で優秀なブランドを有している先進的な農業地域であるからです。また農村観光の対象地域としての地理的有利性を有していることもあげられます。ソウル首都圏のメリットを活かした多様な市場確保の可能性を持っていることもあります。さらに安城市の多様な文化資源を活用することがあげられます。

具体的には、安城マチュム、ナムサダン、太平踊など伝統文化の宝庫な地域であることもあげられるでしょう。

5 事業おける大学のあり方

先ほども申しましたが、大学のあり方で申しますと、大学はこれからもつと活発に社会に貢献するような仕事をしなければならいと考えております。例えば、このような街づくりは大学がするものではないと考える方もまだまだ多くいるかもしれません。そのような中において、行政や民間ができないような部分を大学が行った場合、スムーズに行くかもしれないと考えております。この計画を立てるにあたり、行政や大学の職員などにも話したところ、当初は一

人として理解することができた人はいませんでした。そこでメンバーの10人ぐらいを連れて、「一度富良野を訪れてから話し合います」と言うことになりました。帰国後、彼らは、私以上に街づくりの計画を考えるようになったのです。こういうことを通して

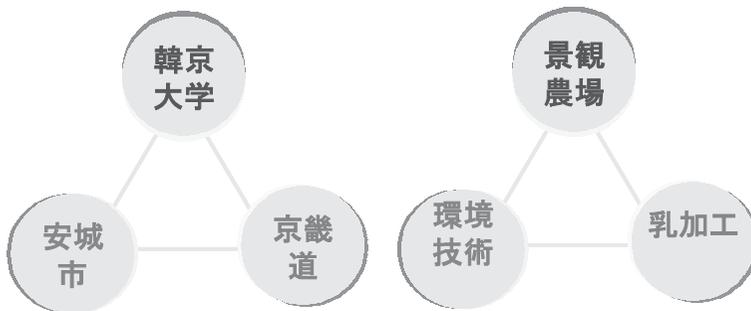


図1 官・学・民によるクラスター構成と親環境農業の連携

「官、学、民」が一緒に仕事ができるのだと考えております。

具体的に事業の基本概念(図1)をまとめると以下のようになります。①官、学、民によるクラスター構成効果が期待できること、

例えば、京畿道からの政策的な財政支援、安城市からの財政及び行政支援や、大学の専門技術及び敷地が活用できることなどです。②親「環境」農業の連携によって事業成果がうみだされること。例えば、農村環境の商品化、首都圏の家族単位の短期滞在型農村観光、地域産特産物の加工と販売によって地域特産品のイメージアップを図ることなどがあげられます。

6 事業の内容

つぎに対象地の概要についてみていきましょう。安城市(図2)は、ソウル首都圏の南に位置しております。大学から7kmほど離れた農場に事業拠点を設置しようと考えております。事業の必要性として、週休二日制による観光客の増加に伴い、地場産農産物を加工出荷型へ移行させ付加価値を高めた特産品を創出することです。また安城市では二〇〇七年に世界軟式テニス選手権大会が開催される予定のため、近くにはスポーツ関連施設群が展開しています。そのような場所では観光名所開発の極めて高いとかがえられます。



図2 安城市の位置

7 農村観光

そのため景観農場の設置が計画されています。ここでは、農村観光に加え多様な手づくり体験工房や手づくり体験実習を行い、地域住民を対象とした体験講座を開催します。また多様なテーマを構成し、年中利用または随時開催で事業性を付加する予定です。現在、富良野市やドイツの事例などを参考に考えています。安城市は観客数動員数一、〇〇〇万人を超えた映画の舞台ともなっています（図3）。



図3 景観農場のコンセプト

8 乳加工プラント建設と畜産分野の競争力確保

もう一つは富良野市でも行われているチーズ加工の体験などでもできる乳加工プラントの建設です（図4）。その目的は、地場生乳加

工であり、畜産分野の競争力を確保することです。農家型小規模乳加工モデルプラントを造成し、それを農家に普及（乳質改善指導↓加工↓地域ブランドの確立）させること。また販売と流通の面では手づくりの製品や消費者ニーズに応える付加価値の創出を考えています。そのため乳製品加工プラント及び販売施設（ソフトアイスクリーム、ヨーグルト、市乳など）では、新製品開発をし、それを地域特化ブランドとします。他に体験実習（バター、アイス、ソーセージ、ハム作りなど）が考えられています。また市民の生活パターンの変化（週5日制）や、農業への信頼確保という側面にも対応していきたいと考えています。

9 バイオガス生産を通じた環境対策

三つ目としては、安城市で問題となっている畜産糞尿の処理であり、それを解決させる一つの方策としてバイオガスプラントを建設します（図5）。事業の目的としては、バイオガス生産を通して、再生資源（家畜ふん尿、生ゴミ）の親「環境」的な処理と効率的な清浄エネルギー生産の基盤構築が可能となります。現在、家畜ふん尿処理問題及び資源化に対する課題は深刻な状況となっています。首都圏地域の家畜ふん尿発生量はピークに達しています（全国の二四・一％）。

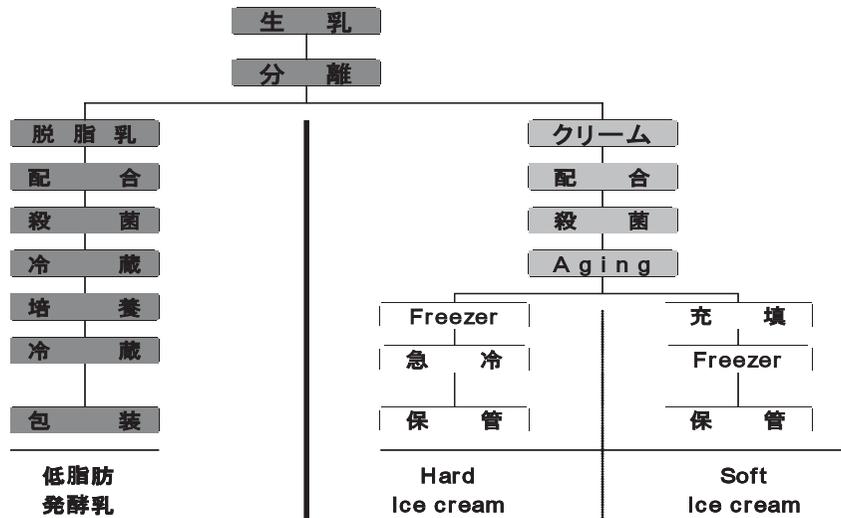


図4 乳加工プラント

環境規制（水質汚染や悪臭）の強化で家畜ふん尿問題が環境課題として急浮上（二〇〇五年二月）しています。再生生エネルギーの資源化技術の開発及び実用化の必要性が強くなっています。富良野市における環境衛生センターは大変参考になります。費用的には韓国では考えられない金額ですが、大変参考になります。

今後の推進方向としては、バイオガスの生産量及び電力生産施設導入のため、モデル研究事業を進めていきます。まず本学バイオガスセンターが設立（二〇〇六年三月）され、最適な嫌気性工程及びバイオガス生産システムを構築しています。また、バイオガス生産用 plant の設備試運転やバイオガスによる熱燃料と発電システムの実用化研究事業が進められています。これが地域農畜産業に及ぼす効果として、家畜ふん尿処理問題の解決及びコストダウン効果が期待されているのです。さらに地力増進（土壌改良剤）や有害病原菌や雑草種子が除去された堆肥の有効活用なども期待できます。安城市の住居環境に及ぼす改善効果として、悪臭発生源の除去で苦情発生の防止、生ゴミなどの有機性廃棄物のリサイクルの推進や環境に優しい安城市のイメージアップへと市民の関心が誘導されることとなります。

現在、専門家を交えながら計画は着々と進められており、予算は知事に陳情し三〇億ウォンが計上されています。二〇億ウォンは京畿道が、残りの一〇億ウォンは大学と安城市で負担することになっ

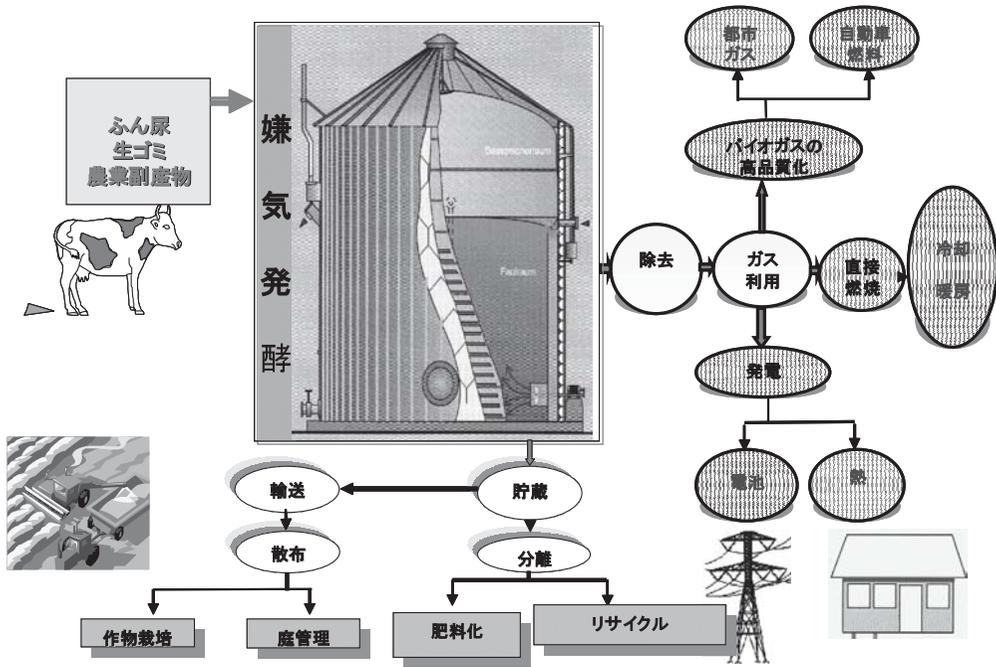


図5 バイオガスプラント

ています。また内訳として、一〇億ウオンはバイオガスプラント建設、残りは景観農場や乳加工プラントの建設に使う計画となっています。

10 結論

この事業の結論としては、官・学・民クラスターの構築により地域の発展をさせていくことが重要です。具体的に事業により期待できる効果として、まず大学では首都圏の特性に対応した現場教育の強化が期待できます。実質的な現場技術の開発や官・学・民クラスターによる相互協力が活性化します。また地場資源を中心とした農産物の付加価値で地域経済の活性化が実現し、具体的には地場産特産品の付加価値をつけ、競争力の強化を図ることができます。そして新たに地域共通の教育と文化産業の育成を図ります。地域教育と文化のイメージアップ、旅行者の増大により直接的・間接的な消費の拡大が見込めますし、さらに新規雇用機会の拡大にもつながっていくことが期待できます。

最後にここで富良野市に提案したいことがあります。富良野の取り組みは、私共のように外部から見るととても素晴らしいと思いますので、これからのキャッチフレーズを「アジアの富良野」で進めたいってはいかがでしょうか。ご静聴ありがとうございました。

「農業に魅せられて」...その1

新田 みゆき

私たちの小さな農場は、日本

最北端の稚内市にある。日本海沿いから少し内陸に入った上勇知（かみゆうち）地区に縁あって住まいを構えたのが、十一年前。その一年後に平飼い養鶏をはじめた。農場の名前は、自然に沿う暮らしを営んできた先人たちへ敬意をこめて、「風」というアイヌ語から「レラ」と名付けた。

きめつけと思い込み!?で
はじめた養鶏業

稚内で生まれ育った私は、実家の父はサラリーマン、母は理髪店を経営していて、私も農業とは縁遠い商社に勤めてOL生活を送っていた。

ただ、OL時代から、農業に漠然とした憧れを抱いていて、消費者として生産者訪問や援農

をした経験はあった。

でも、農学や畜産学を学んだわけではないし、きちんとした研修経験もなかったため、小規模とはいえ、いきなり養鶏を仕事にするのは、今にして思えばかなり無謀な話であった。

だが、念願の田舎暮らしを始めた当時の私は、アレルギー症状を持つ我が子に素性の知れたものを食べさせるためには、自分で作るのが一番だ!ときめつけていた。そして、自分の体験に基づいて生産する卵やお肉を買ってくれる人は、必ずいるはずだ!とも思い込んでいた。あまりに楽観的で稚拙な考えで、今、思い出しても、穴があったら入りたくなるほど恥ずかしい。

夫がいてくれたからこそ

経験もないのに、やる気だけ



新田みゆき(につた みゆき)さん

1964年 稚内市生まれ

1997年 稚内市上勇知にて養鶏業開始

夫 由 憲(42歳) 拓殖大学北海道短期大
学環境農学科新規就農
コース在学中

長男 美 春(高1)

長女 みのり(小6)

2 ha の農地を所有し、平飼にて鶏250羽を
飼育

は満々になっていた私の心情を
理解し、冷静に受け止めて、飼
育方法や経営面について細やか
なアドバイスをしてくれたのは
夫だった。

当時、地方公務員として勤め
に出ていた夫だったが、仕事が
休みの日も身体を休めることも
なく、前の持ち主が離農した後
は廃品置場となっていた牛舎の
片付けに精を出し、鶏を飼える
ように鶏舎に改築してくれた。

夫と出会っていなかったら、私
は職業欄に「農業」と書くこと
はできなかったと、つくづく思
う。

こうして夫のおかげで出来上
がった鶏舎に四百羽の鶏を迎え、
よちよち歩きだった娘をオンブ
しながら作業する母ちゃん平飼
い養鶏は始まった。

一石二鳥の工サのお話

我が家の子どもたちは二人と
もアレルギー体質で、まだ母乳
しか飲んでいない頃から、アト
ピー性皮膚炎に悩まされた。私
や夫からの体質的な遺伝も関係
していたのだろうが、本人たち
が直接食べ物を口にしていない
のに、私が食べた物を母乳を通
して間接的に口にただけで、
子どもたちのアレルギー反応が
あらわれたのである。

母乳育児をしていた頃は、食
べ物が身体に与える影響と常に
向き合うことになり、食べ物の
大切さをしみじみと感ずること
ができた。

ヒトとニワトリは違う！とお
叱りを受けそうだが、同じ生き
物であることに変わりはない。
アレルギーは複雑な要素がいく

つも絡み合って症状が出るといわれているので、私は母乳育児での経験から、不安な要因はひとつでも取り除きたかった。

だから、娘のアレルゲンのひとつであるトウモロコシを使わずに、北海道産の規格外小麦を飼料として鶏たちを飼育してきたのは、子どもが安心して食べられるものをつくるという親心と、地域資源を活用するといった目的を満たすことのできる、

一石二鳥の取り組みだった。

自慢できる地元調達飼料

子どもたちのアレルギー病状が軽くなった現在も、鶏たちのエサの主体は、道産小麦だ。それに地元のお米屋さんの米ヌカや目殻、炭カルなどを混ぜた自家配合飼料を与えている。

そして、うちの自家配合飼料の中で一番特徴があるのは、タンパク源としてエサに加えてい

る加熱済みの鮭フレークの残さだろう。稚市内にあるHACCPの承認を受けた水産加工場から分けていただいている。残さといっても、スープレック用に丁寧に処理されたもので、鮭の皮や身に含まれるマリソコラーゲンたっぷりの品質の高いものだ。

鶏たちの嗜好性も高く、外気温がマイナス二十度を下回る厳冬の朝も元気に卵を産めるよう、健康な状態を支える栄養素が含まれている。

鮭フレークの残さは、日本海とオホーツク海に挟まれた水産が盛んな稚内らしさがびっしりと詰まっている私の自慢の地元調達飼料なのである。

スーパーでの出来事

「あら、良かった。今日は買

えないと思ってたわ。お宅の卵待ってたのよ。」スーパーで品出しをする私の姿を見かけて、お客様が声をかけて下さる。

「すみません、お待たせしました」というお詫びの言葉と合せて、その時々鶏たちの様子や与えているエサのことなどをお伝えしながら、卵が入ったパックを手渡す。

ほんの、二分の立ち話で、お名前も存じ上げないお客様とのやりとりだが、作り手である私と食べる側のお客様とのつながりを感じられる、貴重なチャンスだ。こういった機会に、卵の味についての感想を聞かせてくださる方も多い。

売り場は戦いの場!?

スーパーに買い物に行く方は、卵売り場には、有名大手メー



鶏舎内



卵売り場

カーが生産するさまざまな商品が並んでいることはご存知だろう。

私の友人や知人の間では、一個あたりの価格が二十円前後の卵は「普通の卵」と呼ばれ、一個当たりの価格が二十五円から五十三円くらいまでの卵は「高い卵」と呼ばれているようだ。買って下さっている方の気持ちになってみると、品質

チェックのために、私も時々、納品先のスーパーのレジを通つてうちの卵を買う。うちの卵の小売価格は、六個入りで税込み二百九十八円。いわゆる「高い卵」だ。

ビタミンやヨード、DHAやカテキンなどを加えて飼育した鶏が産んだ卵を扱う大手メーカーのものは、それぞれの卵の特徴をわかりやすく端的に伝えられるように商品名が工夫されている、ラベルのデザインもおしゃれだ。こうしたことは、小さな卵売り場が、いかに売るかという戦いの場でもある証かもしれない。そんな中に混じって並ぶうちの卵の商品名は、「勇知（ゆうち）の卵」。私たちが暮らしている地名を使った、とてもローカルな商品名だ。

素朴といえは聞こえが良いが、冷静に観察してみると、うちの卵はとても地味でやぼったい。きらびやかなアイドルの中に、田舎娘が入ったような状態だ。我が家の卵の売り先はスーパー

ただではなく、お客様に直接お届けする宅配もしているが、今はテレビやインターネットで簡単に買える物ができる時代だ。卵とて、例外ではない。うちと同じように、飼育方法や生産過程を開示して売られている卵はたくさんある。輸送時の温度管理もされているので、遠くからでも鮮度は保たれる。スーパーに行っても自宅にいても、欲しい物は自由に扱える。そんな風に溢れんばかりの物の中から、「高い卵」であるうちの卵を扱ひ、買っていただいていることを、心からありがたい

いと感じている。子どもに安心して食べさせたい一念ではじめて母ちゃん平飼い養鶏を、一年、また一年と続けてゆけるのは、買ってくれるお客様がいてくれるからなのだ。

地域での循環を大切にしたい

我が家は、鶏卵の販売だけでなく、放牧主体で育てた和牛や、地域でとれたジャガイモや北海道産の小麦・コメの規格外品を飼料にして育てた放牧豚のお肉の生産も行ってきた。

人間は食べられないが家畜のエサとしては十分使えるものを、ひと手間かけて飼料にし、ゆっくりと育て、販売する。牛肉、豚肉ともに、ごく限られたわずかな生産量ではあったが、地元のお肉屋さん協力していただ



豚さんたち



地元お肉屋さん

き、スライス加工や包装をしてもらったお肉は、おいしいと好評だった。また、愛嬌のある豚たちは、農場訪問のお客様たちの人気者で、命をいただくことの意味を伝える有能なメッセンジャーだった。

だが、天塩町の食肉センターが休止されてから、我が家の小さな直販活動も休止中だ。地域の小さな循環が成り立つためには、食肉センターなどの施設は欠かせないと感じている。投資効果などを考えると運営は厳しいと思うが、地域で生産される物を活かした食文化をはぐくむためにも、一日も早い再開を願っている。

農業に魅せられた瞬間

こうしてあらためてふりかえてみると、あつという間に

十年が過ぎたように感じる。十年ひと昔というが、自分が世話をした鶏が産んだ卵に自分たちで値段を決めて、初めてお代金をいただいた時の気持ちを、私は今でもはつきりと憶えている。私が農業に魅せられた瞬間だからだ。

だが、それは同時に、良い卵を作ることができたとしても、それを売ることができなければ、農業を続けられないという厳しい世界に踏み込んだことでもあった。

でも、人が生きていくうえで必要な食べ物を生産することで糧を得る農業に就くことができた喜びは今も変わらない。それこそが、私を動かす大きなエネルギーだと日々感じている。

「手習い」イギリス文化論

第7回

～アイルランド探訪～

北海道大学創成科学共同研究機構

明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門 博士研究員

小林 国之

やり残した宿題

やはりアイルランドに行こうと思いついた。イギリスに来る前の私にとって、アイルランドは是非とも行ってみたい国の一つであった。理由は自分でもよくわからない。この国のもつ、音楽や文学の独自の文化、苦難の歴史とそれを乗り越えた人々がもつ優しさ。こうしたいわば「おとぎ話的」な聞きかじりの蓄積が、私のがれの遠因であろう。その点で、一般的日本人が成長していく過程でもつごく普通の感覚といつてもいい。

こちらで暮らしている間に、そんな思いを次第に忘れていった。一つには、ヨーロッパ大陸のほかの国に行ったこともあり、時間的、予算的な制約があつたこと。それよりも、隣国ということもあり、いざ行くとするとその気になかなかならなかつたというのが、正直なところであつた。

それでも、日本への帰国の日が近づいてきた初冬のある週末に、格安航空券を手に入れてエクセター空港から首都ダブリンへと飛ぶことにした。今回の旅のとりあえずの目的は、イングランドとの「違い探し」とした。アイルランドといえば、すぐにくつかのステレオタイプなキーワードを思いつく。ギネスビールにアイリッシュ音楽、ジャガイモにカソリック。しかし、

小林 国之(こばやし くにゆき)氏

- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年 3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了(博士(農学))
その後、北海道大学大学院農学研究科研究員を経て
- 2004年 4月 日本学術振興会特別研究員(酪農学園大学酪農学部所属)
- 2007年 4月 北海道大学創成科学共同研究機構 明治乳業「乳の価値創造研究」
寄附 研究部門 博士研究員

主な著書

『『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防』(株)日本評論社 2005年

英語を公用語とし、パブ文化があり、イギリスのテレビ番組も簡単にみることができるというアイルランド。イングランドとはどう違うのだろうか。わずか二泊三日の限られた時間のなかで、とにかくできるだけ、「違い探し」を試してみようと思った。

アイルランドに行くとき伝えた同僚が、「本場のギネスの味を楽しんでこい。それと、ジャガイモがすごく美味しいぞ。」といった。果たしてこれは彼の真意なのか。それとも世界中に流通している「世界商品」としてのギネスビールと、パンを食べられないかった「貧しい」アイルランド人の主食であったジャガイモにたいする、イギリス人の皮肉なユーモアなのか。そのことも、むこうに行けばわかるかもしれない。

つまり、多少なりともこの約二年間の滞在で「イギリス化した自分と比較基準にしながら、一見イギリスと似たように見えるアイルランドを観察しようという算段だ。自分がどれだけイギリス化したのか、それをはかるリトマス紙のような効果も、その「遊び」の中に少し期待しつつ出発した。

アイルランドという国

エクセター空港を午前九時五十五分に飛び立った飛行機は、一時間のあつという間のフライトで、ダブリンの北約十五キロ

に位置するダブリン空港へと到着した。人口約四二〇万人のアイerland、ダブリンはその三分の一が住むといわれる首都である。ところで、ヨーロッパは大雑把に二つに分けられる。それは、ローマ帝国の支配下になった地域とそれ以外である。その違いが文化や社会構造などに様々な仕方でも影響を与えているといわれている。ローマ軍は統制された軍隊という物質的な進歩性と、キリスト教をもとにした精神的な進歩性を「武器」としてヨーロッパ各地を席捲し、「遅れた」地域を文明化していった。支配下に入った地域ではローマ式の社会経済運営システムが形成されていき、そうでない地域には独自のシステムが生き残った。

イギリスのブリテン島に上陸したローマ人達は、徐々に西へ進出していく。私の住んでいるエクセターはローマ人によって建設された街で、南西部へ勢力を伸ばすための前線基地であった。しかし西ローマ帝国はさらに西にあるアイランド島までは上陸しなかった。

ローマ帝国の軍隊が一度も上陸しなかったこの島に、キリスト教はローマ人の一青年パトリックによって四三二年に持ち込まれ、広められた。このパトリックが現在のアイランドの守護聖人である聖パトリックである。アイランド島から蛇や有毒の動物を追い払ったという伝説をもつこの伝道師が、ドルイ

ド教を信仰していた人々にキリスト教を布教した。この島の人々の運命に大きな影響を与えることになるキリスト教、カトリックの伝来である。

ローマ人から「冬の島」と呼ばれていたアイランドは、ローマ帝国による文明化作用の枠外にあった。アイランドでは長く統一国家が成立せず、氏族制を中心とした複数のグループから形成されていた。そのことの一因は、内陸部に社会・経済の要所となるような地理的・地政的ポイントがなかった点にあるらしい。現在の首都ダブリンは、リフィー川という市内を東西に流れる河川が内陸部進出への拠点となるという理由から、北欧人やアングロサクソン人などの侵入者によって開かれた街である。

ローマ帝国の支配下となった地域は、教会が地域の行政権の中心にあるという構造をもっていた。一方アイランドでは、氏族を中心とした村落（血縁・地縁関係）を基盤として、その上にキリスト教が根付いたといわれている。そうした社会構造が、現在まで続くアイランドの特徴としての共同体の強さの土台にあるようだ。

ダブリン接近

さて、前置きが長くなりすぎた。

空港からダブリン市内に向かうバスに乗り込んだ。イギリスと同じく左側通行で走るダブルデッカー（二階建てバス）の二階前方に、女性ばかり十名ほどのグループがいた。大声で楽しそうにおしゃべりに興じる彼女たちの言葉を、全く聞き取れない。東欧の言葉のようにも聞こえるが、時折英語のようにも聞こえる。あとになって、彼女たちはアイルランド語（ゲール語）を話していたのかもしれないと思った。道路標識にかかれた、見慣れたアルファベットの見慣れない配列（アイルランド語表記）をみながら、異国にきたのだという思いが突如として高まった。

道路工事の都合で、町の中心部の一キロほど手前でバスからおろされた。その周りはジョージア朝風の建物が建ち並ぶ一角である。二泊分の着替えを詰め込んだいつも通勤に使っている小振りな鞆を提げたまま、しばし立ちつくした。一体中心街はどこらだろう。手元には、今日から泊まるホテル周辺の地図がある。とりあえず中心街にさえ着けばホテルまでは行ける、という目論見で準備したものであるから、中心街に着かないこと

には役に立たない代物である。人の流れをたどりつつしばらく歩くと、大きな河にでた。これが先ほど述べたようにダブリンの発展にとって決定的な役割を果たしたリフィー川であることは、あとで知ることになる。

ここまでたどり着いて、やっと市街地の見当がついた。そこで旅の定石どおりに、一路ツーリストインフォメーションを指した。ダブリンだけではなく、アイルランド全体の観光に関する情報が手にはいるからだ。道路沿いに立てられている「i」の看板を頼りになんとかたどり着き、市内の地図とホテルの場所、ついでに有名どころのパブを数件チェックした。



ダブリン市内を流れるリフィー河



ダブリン市内

アイリッシュパブ

ツーリストインフォメーションの教会風の建物を出たあとで、すぐ近くにあったパブにはいることにした。通りから窓越しに見える店内は薄暗く、様子をうかがうことはできないが、何はともあれ玄関のドアを開けた。ハロウィーンの飾り付けがされている薄暗い店内で、とりあえずイスに腰掛けた。注文をしようとおもいメニューを片手に、忙しそうにきびきびと動き回っている白シャツに黒パンツとベストを着たウエイターと、アイコンタクトをした。料理を運んでいた彼は私の目を見て、「ちよつと待つてる」という意味でウインクを返した。

入り口を入れてすぐ左側には長さ約五メートルほどのカウンターがある。カウンターの中では年の頃二十歳ぐらいといった女性が、忙しそうにサンドイッチを作っている。スーツを着たサラリーマン風の男性客が、サンドイッチの具材をあれこれ注文している。

しばらくすると、先ほどのウエイターに注文をしたギネスが運ばれてきた。トレーに載せられたパイントグラスの中の真黒い液体は、クリームのような泡を表面のうつつすらと載せてたらずんでいる。壁際におかれた脚の長い丸イスに陣取った私は、

壁に沿って柵のように取り付けられた奥行き三十センチほどの細長いテーブルに載せられた、ついに巡り会った本場のギネスをながめた。そしてクリーミーな泡を上唇でよけるようにして、黒い液体を一口含んだ。芳醇な香ばしさが鼻から抜けるのを感じつつ、ゆっくりと飲み込む。うまい。思ったよりもすっきりとして飲み口である。が、イギリスでいつも飲んでいるものとの違いは、と聞かれると、正直よくわからなかった。

このパブでは、ウェイターが席まできて注文をとってくれて、さらに飲み物も運んでくれた。これは、自分でカウンタースタイルとの違いだ。早くもイギリスとの違いを発見したかと思ったのだが、ほかのパブでは、イギリスと同じようなスタイルだった。少し考えてみて、これはアイルランド人の人の良さの関係しているのかもしれない、と思った。彼は所在なげに入ってきたアジア人に気を利かせて、注文をとってくれたのである。イギリスでは、こういった「優しさ」は期待できない。それはイギリス人の「慎重深さ」の冷たい側面である。困っているように見える人がいるからといって、あれこれ世話を焼くというのは、出過ぎたまねなのだ。相手は困っているように見えるが、実は全く困っておらず、声をかけることがか

えって迷惑になるかもしれない。それならば、声をかけずに気がつかない振りをする方が、相手にとって都合がいいのではないか。そこまで考えてイギリス人はみても見ぬふりをするのである。一方アイルランド人は、困っているように見える人がいて、自分が手助けしてあげようと思えば、素直に行動に移す人々のようだ。



アイリッシュパブ

もし仮に、人間の感情が表面上に行動として表れるためには、なんらかの装置「文化」と呼べるかもしれない）が必要だとすると、イギリス人のそれは複雑、重厚な内部構造をもっており、たいていの感情はその動力伝達過程で吸収されてしまい、動きとしてはほとんど現れない。それに対してアイルランドの人々のそれは、明快で軽やかにできており、感情が直接的な行動として表れている。そんな印象を受けた。このことは、私があとで経験した別の出来事からも話している。

ギネスを三分の一ほど飲んだ頃に、アイリッシュシチューが運ばれてきた。ジャガイモ、ニンジン、セロリ、タマネギなどを煮込んだ素朴な味のシチューを食べていると、玄関の鈴が鳴って、白人の大人が四人と一台のベビーカーが入ってきた。特徴あるアクセントが彼らがどこから来たのかを物語っている。彼らアメリカ人が入ってきた瞬間、不意に想像の舞台が、新大陸へとわたっていったアイルランド人が始めたパブへ瞬間移動した。

現在世界の経済、金融の中心であるアメリカ。その中心地であるニューヨーク、マンハッタン島は、一六二六年にオランダ西インド会社がネイティブアメリカンから二四ドル相当で買い取ったのは有名な話である。それを一六六四年に奪い取ったイ



アイリッシュシチュー

ギリスが、その指揮を執ったイギリスヨーク公にちなんでニューヨークと名付けた。

先発組として集团的、組織的にアメリカ大陸へ移り住んだアングロサクソン系（イギリス人）が勢力を伸ばしていたマンハッタン島にあとからやってきたアイルランド系移民達は、あいている土地を求めて島の南の部分に住み着いた。移住してきた彼らが、自分たちの守護聖人にちなんで立てた聖パトリック大聖堂は、現在は巨大なビル群の中に取り残されるようになっている。

さて、かれらは移住する際に故郷の村からパブを持ち込んだ。パブこそは、共同体的結びつきを確認し、はぐくむための重要な場であった。母国で飢餓や迫害から逃れてたどり着いた新天地は、誰もいない無人の土地ではなく、アングロサクソンの支配する土地だった。遅れてきた移民達にとつて、パブは自分たちの故郷を忍ぶと共に、外部と戦うためのエネルギーを再充填するためのベースキャンプのような役割を果たしただろう。移民達の戦いの歴史は、アメリカの歴史そのものである。移民は、その次なる移民達が来ることによつて、初めて移民ではなく自国民となる。アイルランド系移民は、新移民といわれるイタリヤ系、ユダヤ系、ポーランド系の移民が入ってくることによつてアメリカ人となつていった。長い年月をかけて、徐々にアイルランド人の経済的、社会的な地位は向上する。ついにアイルランド系のジョン・F・ケネディーが大統領になるまでに至る。

コミュニティの核としてのパブは、長らく部外者の進入を拒んできた。古くは排斥の対象であつたアイルランド文化が濃縮された場所であるパブに、現在は観光のためにアメリカ人が訪れる。それをアジア人の私ながめる。時間の流れ、歴史がもつドラマティックな作用を勝手に感じて、感動しつつ一人ギネスを飲んだ。

アルバーニーハウスホテル

パブを出て、繁華街を抜けて歩くこと約二十分。目的のホテルへ到着した。ジョージア朝風の建物が建てられた一角にあつたホテルは、通りに沿つて続く五階建てのアパートのような建物の一部をしめている。横幅は狭く、上に長い構造だ。一階はフロントと小さめの食堂があるのみで、二階からが客室となつている。建物にエレベーターはなく、五階の私の部屋までは、時折きしむ階段を上るしかない。各階の天井は高く、階段と踊り場も広々として、巨大な絵画が飾られている。手提げ荷物一つだけの私でさえも息を切らしながら五階まで昇る途中で、大きなトランクを引きずるように運ぶ女性二人組を見かけた。彼女たちは明らかに、エレベーターのないこの「歴史ある」建物に好意的ではないように見えた。

パブで食事を済ませしてきた私はホテルで一休みしてから、夜のダブリンの街へ繰り出した。ひとしきり街中をぶらついた後、近くのスーパールでお酒を買つてホテルに戻ると、玄関のドアに鍵が掛かつていた。ドアのガラスから覗くと、フロントにはチェックインの時にいた女性とは違う、初老の男性が立っ

た。時刻は夜十一時を過ぎた頃である。私を見つけた彼は、名前と部屋番号を確認して鍵を開けてくれた。手に提げたビール入りの袋をみつめて「これから飲むのか?」ときいてきた。そうだよ、と答えて階段に向かおうとすると、「どこから来たのか?ちょっと話をしないかい?」と立て続けに話しかけてくる。あっさりとしたイギリス式のコミュニケーションになっていた私は、やや面を食らいながらも、ロビーにあったソファアに座った。

挨拶程度の会話の後で彼は、「オレはおまえが気に入ったよ。おまえはどうだ」と聞いてきた。すごい質問である。たった数分の会話でここまで人のことを信頼してしまうとは。曖昧な日本人の私は、適当に返事をした。あまりの人なつっこさに驚きを隠せない私の脳裏を、単なる好意以上の可能性(危険性)がよぎった。とっさに彼の左手の薬指をみると、指輪がはめられている。結婚はしているようだ(その相手が女性とは限らないが)。「最近の若者は穴あきのジーンズをはいているんだな」といって太股の穴をさわってきた。家が農家だったというおじさんの手は、働く男の無骨でたくましい手だ。

話をそらそうと思い、おじさんの出身地を教えてください、と聞いて、少し離れたテーブルに置かれた地図をみようと立ち上がった。地図をみながら背中を向けている私の後ろに忍び寄り

てきた彼は、「おまえはやせているなあ」といって腰の辺りをさわってきた。

こちらでは「ゲイ」であることは隠すことではない。「私はストリート(ゲイではない人)なんだ。」といえば、「そうか」ということになる。認められている個性の一つのようなものだと、友人が言っていた。そうはいつても、なかなかどうしていいわからない。もちろん、彼は単なる親切な話し好きのおじさんという可能性だってあるのだ。とりあえず失礼の無いように話を切り上げて再び階段を目指した。すると、「酒を飲んだらまた降りてくるか?」と聞いてきた。階段への道のりは遠い。「そうだね、元気があったら」といって、ついに脱出に成功した。

部屋に戻って、今の出来事を反芻しながら、ビールを飲んだ。三十分ほどして、そろそろ風呂にでも入ろうとしていたら、部屋の電話がなった。電話の主はもう判っている。受話器を取ると、「まだ降りてこないのか。」というおじさんの声。そう、あのおじさんは私のルームナンバーを知っているのみならず、その気になれば、合い鍵で進入することも可能なのだ。そんな風に勝手に自分のなかの恐怖心をあおっていると、本気で怖くなってきた。ここは、曖昧にしたまま不安な夜を過ごすよりも、もう一度おじさんであって、彼の真意を確かめる必要があると

感じた私は、風呂から上がったなら降りていくことを約束して受話器を置いた。

結論から言うと、おじさんは親切心から私によくしてくれていたようだ。風呂に入ったあとロビーで三十分ほど話した彼は、自分が週末だけホテルの守衛として働くために、ダブリンの南電車で1時間ほどの村から通ってくるのだということ、自分の村のいいところを話してくれた。またダブリンに来ることがあつたら、是非このホテルに宿泊して欲しいと彼は話して、私は部屋に戻った。

ほぼ無条件に人を信用して、「おまえが気に入った」と出会ったばかりの人に言うことができる人達の、素直さと懐の深さ。彼らがたどってきた過酷な歴史を想うとき、アイルランド人の心の力強さに触れたような気がした。

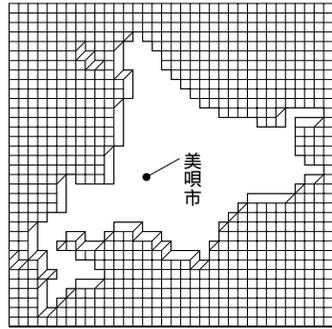
さて、こうした始まった私のわずかに三日のアイルランド滞在は、例のおじさんが薦めてくれたダブリンの南にある海岸沿いの街への列車の旅や、全くあてもなく途中下車した街でのケルト文化との出会い、ダブリンで見かけた生活と音楽、ダンスとの幸福な関係など、様々な違い探しにあふれていた。このことは、機会があればまた書いてみたい。

夏の時期に再びアイルランドに行こうとおもっ。夜遅くまで



途中下車した駅

日が沈まない長く明るい夜を、彼らは音楽とビールとおしゃべりで陽気に過ごしているに違いない。きっとあのホテルのおじさんは、また暖かく私を迎えてくれることだろう。



あのマチ・地域おこし活躍中
このムラ

No.48

美唄市の事例

1 美唄市の概要

美唄市は、空知管内の中央部、札幌市と旭川市のほぼ中間に位置している。「美しき唄のまち」と言われる美唄の地名はアイヌ語の「ピバオイ」に由来している。「沼の貝（カラスガイ）の多いところ」という意味である。この地は一八九一（明治二三）年に沼貝村として誕生し、翌一八九二年から開拓が始

まった。純農村としてスタートした美唄は、大正から昭和初期にかけて大規模な炭坑開発が行なわれ、人口も増加した。一九二五（大正十四）年には町制が施行され、一九五〇（昭和二五）年に市制を施行した。その後、一九五六（昭和三一）年の人口九万二千人をピークとして、一九六〇年代からの炭坑閉山により人口は減少し、現在の人口は約二万八千人となっている。現在は農業を基幹産業としてお

り、二〇〇四年の時点で農家人口は約十五%となっている。総面積の三四%が農地で、そのうち約九割が水田である。農産物は、米、小麦、大豆、アスパラガス、花卉、ハスカップなどの生産が盛んである。観光資源としては、二〇〇二（平成十四）年にラムサール条約に登録された宮島沼や、美唄出身で世界的な彫刻家である安田侃氏の作品が並ぶ芸術の広場「アルテピアッツア美唄」などがある。ま

た、十勝ほど知られてはいないが、実は防風林の景観も美しい郷土の味としては、中村地区のとりにめしが有名であるが、最近では鶏もも肉と砂肝・レバー・卵などの内臓類と皮やタマネギを一本の串に刺して塩味で焼いた「美唄焼き鳥」も全国的に知られるようになってい

さて、美唄の農業構造であるが、二〇〇五（平成十七）年時点の農家戸数は九二三戸で総世帯数の約八%、うち販売農家数

は八一八戸、専業農家数は二四〇戸（総農家数の約二二六％）、第一種兼業農家が四七九戸（総農家数の約五二％）、第二種兼業農家が九九戸で、農家数の約八割が主業農家である。また、同じく二〇〇五年時点の総耕地面積は九、四六〇ヘクタールであり、農家一戸あたりの平均耕地面積は約一〇ヘクタールとなっている。

これを階層別に見ると、一〇〜二〇ヘクタールの階層が約四割と最も多い。

農産生産であるが、二〇〇五（平成十七）年の農産産出額は七八億一千万円で、作物別の割合で見ると、米が六二％、麦類が一八％と二作物で八割を占めている。その他の作物としては、大豆（作付面積が全道三位で収穫量が三位）、アスパラガス（作付面積が全道九位で収穫量は六位）、ハスカップ（作付面

積が全道二位で収穫量は一位）などが代表的である。また、軟白長ねぎや、花卉では、きく、トルコギキョウ、スターチスなどの栽培も多い。米については、環境調和型農業の取り組みとして、水田の畦にハーブを植えてカメムシの防除回数を減らす「ハーブ米」の取り組みが有名である。また、雪を利用した玄米貯蔵や直播による栽培も知られている。なお、美唄市の生産者が組織する農協としては、J A びばい、J A みねのぶ、J A いわみざわの三農協がある。これらのなかから、近年特に注目されている地域振興策として、主力農産物の米についてハーブ米と米粉の利用、野菜生産の面から立茎栽培を中心とするアスパラガスの生産振興、地域資源の有効利用という面から雪エネルギーの利用について、それぞれ紹介したい。

2 ハーブ米の取り組みと米粉の利用

1) ハーブ米の取り組み

美唄におけるハーブ米の取り組みの嚆矢となったのは、一九八八（昭和六三）年に設立された特別栽培米生産・販売グループ「元氣招会」の取り組みであった。元氣招会では、農薬に依存しないでカメムシの虫害を減らすために、一九八九（平成元）年から畦畔にミントをはじめとする様々なハーブの植栽を開始した。ハーブの生育やカメムシの生息状況を試験しながらハーブの種類をスベアミントやアップルミントなどに絞り、これを「香りの畔みち」と名付けた。この取り組みは地域に広がり、J A みねのぶでも積極的に植栽を進め、一定の基準を満たした米は「香りの畔みちハーブ米」という商標で販売している。さらに二〇〇一（平成十三）年からはJ A びばい管内でもハーブの植栽がはじまった。J A や美唄市によるハーブ苗の助成もこれを後押しした。こうした広がりが二〇〇三（平成十五）年三月には、元氣招会の会長である今橋さん夫妻がハーブ米に加え、除草機や捕虫機の研究開発の取り組みが評価され、第三二回日本農業賞大賞を受賞した。また、二〇〇四（平成十六）年には、ハーブ米がYES-1000（北のクリーン農産物表示制度）に登録されている。現在、この取り組みは美唄にとどまらず、全国的な広がりを見せている。このようにハーブを利用した環境保全型の米づくりを広く消費者に知ってもらい、生産者の取り組みを拡大するとともに

技術の向上をめざして、ハーブを利用した米づくりのフォーラムとして、二〇〇五（平成十七）年六月に「ハーブでお米フォーラムinびばい」が開催された。フォーラムでは、ハーブの効用や生活におけるハーブ利用の意義、ハーブ米の取り組み内容や効果、用水路沿いの植栽活動、北海道立花・野菜技術セ



ンターの試験結果やハーブを利用したクリーン農業などについて報告され、意義が確認された。

2) 産官の共同による 米粉の利用

美唄市では、米の消費が低迷する中で、地元農産物の付加価値を高め、生産の振興や農業経営の安定を図り、さらには地場企業による加工等により地域経済を振興することを目的として、市と農業関係者などで「美唄市農業・農村発展ビジョンワーキング会議」が組織された。ワーキング会議では、米そのもので消費拡大を目指すのは難しいとして、二〇〇一（平成十三）年に米粉の製品化や利用の先進地である新潟県を視察し、美唄産米の試験製粉や美唄産米を原料とした米粉製品（パン・麺）の試食会を実施した。道立食品加工

研究センターとの情報交換も行ない、同年秋には市内で米粉パンの販売が始まった。翌二〇〇二（平成十四）年には給食パン製造会社でのライン試験や市内事業者により製麺試験を開始した。そして、二〇〇三（平成十五）年には、学校給食に「米粉パン」が試験導入され、米粉洋菓子の発売も開始した。二〇〇四（平成十六）年には米粉使用クッキーや米粉まんじゅうも発売を開始。さらに三月には「美唄米粉シンポジウム」を開催した。その後も、米粉シュークリームの開発や給食向け「米粉めん」、米粉うどんが試験販売され、学校給食にも「米粉めん」が試験導入された。このように、米粉の取り組みは、ワーキング会議を中心として、そこに関わる生産者、加工業者、市が互いに協力しながら広がってきた。今日、米粉製品製造業者などが中心となった「美唄こめ研究会」が、二〇〇五（平成十七）年四月に設立され、米粉利活用の促進や新商品開発などの取り組みが進められているほか、市民が簡単に利用できる米粉の小袋販売もはじまり、地域を挙げた「米粉のまち美唄」づくりが進められている。

3 アスパラガスの生産 振興と立茎栽培

米の消費とともに価格が低迷する中で、稲作地帯では野菜振興が課題となっているが、美唄ではアスパラガスの生産振興に力を入れている。

美唄では一九七〇（昭和四五年）年に始まった米の生産調整における転作作物としてグリーンアスパラガスの生産が始まった。一九八〇年頃にはJAびば

いのアスパラガスの生産量が全国一となったものの、その後、病虫害や技術的な問題から生産量が低下した。そこで、美唄市グリーンアスパラ生産組合を中心にJ A、農業改良普及センター、美唄市などのメンバーが

以降四月中旬から九月末の長期間となった。また、ハウスの立茎栽培は通常の露地栽培に比べて単収も四倍に達する。この取り組みが評価され、一九九九年（平成十一年）には「ホクレン夢大賞」を受賞している。

一九九三（平成五）年にアスパラガス立茎栽培の先進地である佐賀県を視察し、翌一九九四

平成十年のグリーンアスパラガス生産者戸数は三六戸、面積は二九ヘクタールであったが、

（平成六）年から生産組合の役員が試験栽培を開始することになった。一九九八（平成十）年には栽培マニュアルが完成し、

昨年度は八六戸、栽培面積は三九・五ヘクタールまで拡大している。また、今年度は約五〇ヘクタールの作付予定となっている。

本格的な栽培がスタートした。生産組合ではこの栽培方法を「こもれび栽培」と命名、二〇〇一（平成十三）年にはこの栽培方法によるアスパラガスを、一般公募により「夏得（なつとく）物語り」として商標登録した。立茎栽培により、それまで五月中旬から六月末であった収穫・選果時期が、立茎栽培の導入

この立茎栽培の多くはビニールハウスで行なわれるが、一九九七（平成九）年の導入時には北海道の「元気づくり事業」を利用して一〇〇棟のハウスが建てられた。苗の植え付け時には一〇アール当たり二〇〜三〇立方メートルの堆肥を投入するが、J Aびばいでは「堆肥・くん炭工房」で籾殻堆肥を生産・供給

している。生産組合では、二月に新規作付者に対する栽培講習会、三月に栽培講習会、六月に現地講習会、七月に道内視察研修、九月に道外視察研修を実施し、技術向上に努めるとともに、市場視察、デパートでの販売促進キャンペーン、直売所での販売などを行なっている。

J Aびばいはアスパラガスとハスカップを重点作物として位置付け、産地づくり交付金の一〇アールあたり単価をみると、

担い手がアスパラガスを新規に定植する場合は八万五千五百円と、他の作物よりも高く設定している。

4 雪のエネルギー利用

美唄市は年平均降雪量八mを超える豪雪地帯であるが、これまで、「やっかいもの」であった雪を活用すべく、冷熱エネルギーとしてとらえた取り組みを展開している。

この取り組みは産・学・官で構成された「美唄自然エネルギー研究会」を中心に、民間主導で雪の特性を生かし、これまで七つの施設に雪冷熱エネルギーが導入されている。さらに国の「新エネルギー利用等の促進に関する特別措置法」で規定されている「石油代替エネルギー



ギー」に「雪氷冷熱エネルギー」が追加されたことなどから、市では市民等が行う雪氷冷熱エネルギー導入事業に対し、経費の一部を補助するため、「美唄市雪氷冷熱エネルギー導入事業補助金交付要綱」を制定し、今後さらに環境の保全や地域産業の振興などの視点を踏まえ、「美唄市地域新エネルギービジョン」を策定している。

農業施設での雪の冷熱エネルギー利用としては、まず、一九九九(平成十一)年につくられた「JAびばい氷室貯蔵研究所」がある。これは、石室の中に雪を入れて低温を保ちながら貯蔵するもので、これまで米や野菜や農産加工品の貯蔵による変化について試験研究が行なわれてきた。米の場合は、機械式の冷蔵庫と同様に品質を維持することができ、コストを比べる」とランニングコストを機械式の

六割程度に抑えることが可能である。また雪による低温貯蔵は湿度が高く、温度変化も少ないことから、野菜の場合は包装をしなくても重量や水分の減耗が少なく、糖度が高まるなどの効果が確認されている。JA美唄では、アスパラガスの収穫後、選別までに時間がある場合は、鮮度を維持するために一時的に保管するなどの利用もしている。農産加工品では、発酵食品であ



氷室貯蔵研究所

る味噌を貯蔵し、低温熟成させると、旨み成分であるアミノ酸(グルタミン酸ナトリウム、アスパラギン酸ナトリウム)の含有率がおよそ2倍に高まることも確認された。この効果を生かして二〇〇一(平成十三)年から「美唄雪蔵手前みそ」や「美唄雪蔵みそ漬け」が、美唄自然エネルギー研究会によって商品化されている(写真)。雪の効

果を主力農産物に活用したのが、JAびばいの米穀雪冷温貯蔵施設「雪蔵工房」である。これは、玄米貯蔵量六千トン、雪貯蔵量三千六百トンに及ぶ低温貯蔵庫で、二〇〇〇(平成十二)年に完成した。その後、美唄自然エネルギー研究会では、二〇〇五年度から二〇〇六年度にかけて「美唄雪山プロジェクト」を実施している。これは、中小の雪山(千トン程度)をバーク資材で断熱して、冷熱を利用するも



のである。また、雪の冷熱エネルギーは冷房としても利用されている。公営温泉施設である「ピパの湯 ゆりりん館」や介護老人保健施設、老人福祉施設、賃貸マンション、個人住宅で導入されている。

こうした取り組みの中で、二〇〇二(平成十四)年には「全国明るい雪自治体連絡協議会」による「第五回雪サミットin びばい二〇〇二」が開催されている。また、雪冷房マンション



雪蔵工房

は新エネルギー財団の「新エネルギー大賞資源エネルギー長官賞」を受賞、美唄雪蔵手前みそは北海道開発技術センターの「寒地技術賞」を受賞するなど、評価も高まっている。

5 宮島沼の野鳥と農業の共生をめざして

かつて美唄には国内最大規模

の高層湿原が広がり多くの沼が存在した。そのいくつかは今でも残っているが、最も大きなものが宮島沼である。この沼は、美唄の鳥に指定されているマガンの中継寄留地となっており、春は四月下旬をピークとしてカモ類やハクチョウなども含め、多数の鳥が訪れる。もともと、宮島沼周辺では野鳥の狩猟が行

なわれていたが、一九八九（平成元）年以降、鉛中毒の白鳥やマガンが多数確認されてから、狩猟が自粛されるようになると、

寄留するマガンなどによる小麦の被害が発生するようになった。これに対し、生産者はテグスを張るなどの対策をとり、市もテグスの貸与を行なった。しかしながら、テグスは設置や回収に手間がかかり、追肥作業などの際にも支障が出るなど、生産者からは不評であった。その後、「宮島沼マガン等対策連絡協議

会」が設立され、協議を重ねながら、食害調査の実施、代替採食地の設置、露地トンネル用ポールや鳥追いテープの貸与事業などが行なわれた。その結果、食害は軽減され、さらに、生産者の意向により、ポールやテープを設置した上で食害があつた場合の補償も制度化された。

6 おわりに

以上のように、美唄における地域振興の取り組みは、第一に、主力産品である米の米粉利用や雪のエネルギー利用のように、地域の特徴が資源として生かされている。宮島沼については、

もともと農業にとつては対立する面を持っていたが、地域における工夫や調整により共存の道が開かれた。さらにラムサール

としても活用されていくであろう。第2に、米粉の利用については生産者と加工業者と行政、雪のエネルギー利用については生産者、建設会社、研究機関と行政というように、地域ぐるみの取り組みとなっている。そして、第3に、行政はそれらを主導するのではなく、地域の人々のネットワークをつくり、それを支援していくという手法をとっている。大きな予算は確保できなくても人手の面で支援するというのが、地域の活躍の活

で、他の市町村でも可能な地域づくりの方法と言えよう。

(社)北海道地域農業研究所

専任研究員 酒井 徹



研究会・研修会等への
報告者・講師の派遣
(平成十九年一月
三月)

「平成18年度報徳会講演会」
主催：北海道報徳社
とき：平成19年1月12日
テーマ：地域づくりに活かす報徳哲学
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「サービズ経済論」
主催：札幌大学経済学部
とき：平成19年1月16日
テーマ：協同組合運動とは
講義：奈良孝一
(当研究所・研究部長)

「平成18年度農村女性経営管理
ステップアップ講座」
主催：北海道上川支庁
とき：平成19年1月18日
テーマ：上川農業の展開方向と
女性農業者への期待
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「JACコース研修会」
主催：道南JAC青年部協議会
とき：平成19年1月18日
テーマ：食育を進めるための青
年部の役割
講演：太田原高昭
(当研究所・所長)

「平成18年度農業後継者育成研
修I」
主催：(財)北海道農業協同
組合学校
とき：平成19年1月23日
テーマ：コミュニケーション能力
を高めるために
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「平成18年度農業後継者育成研
修I」
主催：(財)北海道農業協同
組合学校
とき：平成19年1月23日
テーマ：農業経営管理の要点
講義：奈良孝一
(当研究所・研究部長)

「平成18年度野幌報徳会研修
会」
主催：野幌報徳会・JAC道央
野幌支店
とき：平成19年1月25日
テーマ：最近の農業情勢と地域
づくり
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「中央アジア地域開発セミ
ナー」
主催：(独法)国際協力機構
北海道支所(札幌)
とき：平成19年1月29日
テーマ：農協の仕組と制度
講義：奈良孝一
(当研究所・研究部長)

「平成18年度経営管理研修会」
主催：道央地域担い手育成協
議会
とき：平成19年1月31日
テーマ：品目横断的経営安定対
策と道央農業の展開
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「平成18年度高品質てん菜づく
り研修会」
主催：(社)北海道てん菜協
会
とき：平成19年2月5、7、
8、9日
テーマ：てん菜作の経営評価
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「コップさつばろ農業賞フォー
ラム」
主催：コップさつばろ
とき：平成19年2月6日
テーマ：北海道農業 大好き・
おいしい北海道
コーディネーター：太田原高昭
(当研究所・所長)

「ニューリーダー養成研修」
主催：北海道農業大学校（十勝）

とき：平成19年2月6日

テーマ：経営計画策定の重要性
講義：奈良孝一

（当研究所・研究部長）

「2006年度後期生産者交流会」
主催：生活クラブ生活協同組合

合：北海道

とき：平成19年2月13日

テーマ：今、日本の農業はどこに向かっているだろうか？

講演：酒井 徹

（当研究所・専任研究員）

「平成18年度農業後継者育成研修Ⅱ」
主催：（財）北海道農業協同組合

組合学校

とき：平成19年2月14日

テーマ：コミニケーション能力を高めるために

講義：黒澤不二男

（当研究所・常務）

「平成18年度農業後継者育成研修Ⅱ」
主催：（財）北海道農業協同組合

組合学校

とき：平成19年2月14日

テーマ：農業経営管理の要点
講義：奈良孝一

（当研究所・研究部長）

「平成18年度遊休農地解消シンポジウム」
主催：北海道農政部・全国農業改良普及支援協会

とき：平成19年2月19日

テーマ：遊休農地解消と地域農業

コーディネーター：黒澤不二男

（当研究所・常務）

「第13回北海道合鴨水稲会」
主催：北海道合鴨水稲会

とき：平成19年2月24日

テーマ：有機農業をめぐる環境変化と対応の課題

講演：酒井 徹

（当研究所・専任研究員）

「若手職員研修会」

主催：北海道漁連

とき：平成19年2月28日

テーマ：協同組合人としての生き方

講演：太田原高昭

（当研究所・所長）

「平成18年草づくりコンクール自給飼料効率利用研修会」

主催：（社）北海道草地協会

とき：平成19年3月14日

テーマ：穀物飼料の動向と北海道酪農の方向

講演：黒澤不二男

（当研究所・常務）

「十勝JA理事研修会」

主催：北農中央会帯広支所

とき：平成19年3月15日

テーマ：独占禁止法と農協事業

講演：太田原高昭

（当研究所・所長）

「中小企業家同友会南空知支部例会」

主催：中小企業家同友会南空知支部

知支部

とき：平成19年3月19日

テーマ：日豪EPA/FTA交渉が北海道に与える影響

講演：黒澤不二男

（当研究所・常務）

「平成18年度厚真町経営改善研修会」

主催：厚真町

とき：平成19年3月20日

テーマ：グリーンツーリズムを通じた魅力ある農場づくり

講演：黒澤不二男

（当研究所・常務）

「北村地区農業研修会」

主催：研修会実行委員会

とき：平成19年3月27日

テーマ：これからの水田農業のあり方

講演：太田原高昭

（当研究所・所長）

「平成18年度しほろパワーアップセミナー」

主催：士幌町農協

とき：平成19年3月27日
テーマ：畑作経営の現状を見る、
知るための視点
講演：黒澤不二男
(当研究所・常務)

「北海道スローフード&フェア
トレード研究会例会」
主催：北海道スローフード&
フェアトレード研究会
とき：平成19年3月28日
テーマ：道産食材の付加価値向
上と地域の取り組み
報告：黒澤不二男
(当研究所・常務)

人 事 異 動

退任 常務理事・事務局長 鈴木 隆 (3月31日付)
(新勤務先：十勝農業協同組合連合会 企画室
JAネットワーク十勝事務局)

退職 専任研究員 酒井 徹 (3月31日付)
(新勤務先：秋田県立大学 生物資源学部 准教授)

昇任 5月1日付 主任研究員 井上 誠司
(旧：専任研究員)

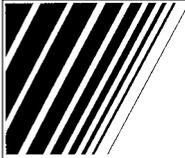
第17回 通常総会の開催

開催日時 平成19年5月24日(木) 午後1時より

開催場所 共済ビル7階「末広の間」
札幌市中央区北4条西1丁目 TEL(011)280 6711

提出議題 議案第1号 平成18年度事業報告並びに収支決算について
議案第2号 平成19年度事業計画(案)並びに収支予算(案)について
議案第3号 平成19年度役員報酬額の決定について
議案第4号 平成19年度会費の賦課及び徴収方法(案)について
議案第5号 役員を選任について

*なお、総会終了後午後2時30分よりコープさっぽろ理事 大滝悦子氏による
特別講演を開催いたします。



DATA FILE

関連事項 / DATA

北海道大学創成科学共同研究機構

〒001 0021

札幌市北区北21条西10丁目

TEL 011(706)9220

FAX 011(706)9220

美唄市

〒072 8660

美唄市西3条南1丁目1番1号

TEL 0126(62)3131(代)

FAX 0126(62)1088

美唄市農業協同組合

〒072 0001

美唄市大通東1条北1丁目2-1

TEL 0126(3)2161(代)

FAX 0126(3)4600

(社)北海道地域農業研究所

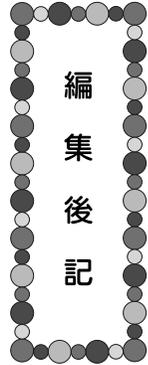
〒060 004

札幌市中央区北4条西7丁目1

TEL 011(281)2566

FAX 011(281)2707

HP: <http://www.chiikinouken.or.jp>



編集後記

・注目の北海道知事選挙の結果は現職の高橋はるみ氏が予想外の大差で荒井聡氏ほかを下し二期目の当選をはたしました。厳しい財政の中でこの4年間の実績が評価され大量得票につながったものと思われま

知事には、選挙公約である道財政再建と経済活性化の両立に向けた政策の実行を希望します。農業関連では当面の課題である日本とオーストラリアの経済連携協定(EPA)交渉へ向け引き続き政府への要請運動、世論づくりなどの陣頭指揮を期待しています。また、今年度は品目横断的経営安定対策が導入初年度であることを踏まえ、厳しい財政の中ですが、道農業の発展のための支援、指導

力を発揮してほしいと思います。・中央会・各連合会では五七四人がまた全道各JAにも多数の職員が入会(職)しJAMNとして社会人の第一歩をふみだした。新たな北海道農業の構築が求められている中、これからの北海道農業をどう展開し発展させていくのか、今後を背負うフレッシュユマの活躍に期待しております。わが地域農研にはフレッシュユマの採用はありませんが役員全

員が初心にかえり事業の展開に当たり、本道農業発展の為の一助となり、本道農業発展の為にしたいと決意を新たにしています。・春の訪れとともにプロ野球開幕、昨年度民を熱狂させた我が日本ハム、看板スターであった新庄・小笠原選手が抜け苦戦をしいられ現在のところ最下位に低迷していますが、まだ始まったばかり監督を先頭に選手・ファンが一致団結、必ず巻き返して昨年の再来を道民皆が願っているものと思えます。また海の方こうに目を転じると注目の松坂をはじめイチロー・松井ほかメジャーリーグで日本人が活躍していますので、早朝から深夜まで眠い目をこすりながら今年一年応援を続けたいと思っています。

「豊かな大地を包みつづける」



ホクレン包材株式会社

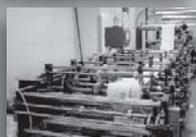
代表取締役社長 士反 英秋

本社 札幌市中央区北4条西1丁目1番地 北農ビル17階 TEL(011)222-3401 FAX(011)222-5394
工場 雨竜郡妹背牛町字妹背牛414番地の1 TEL(0164)32-2490 FAX(0164)32-3120



FUJI PRINT Co.,Ltd.

当社はおお客様の夢を実現するために、
創造力と技術力を常に前進させ続けています。
お客様の夢を当社にお聞かせ下さい。
少しでも夢が現実のものになっていくように
我々は努力します。



デザインから印刷・製本まで
一貫した社内体制で、
それぞれのニーズにお応えします

富士プリントはさまざまな印刷に対応

営業品目

- 定期刊行物 ● 商業印刷物
- 頁物印刷物 ● 記録印刷物
- フォーム印刷物 ● 情報処理加工

附帯サービス

煩わしい印刷物の梱包・発送作業を当社がお客様に代わって致します。

- 封筒入れ ● タックシール貼り
- 仕分作業
- 宅配便・郵便局・コンテナ手配 等

当社は2001年9月3日付で品質マネジメントシステムの国際規格であるISO9001/2000年版の認証を取得しました



富士プリント株式会社

〒064-0916

札幌市中央区南16条西9丁目

TEL.011-531-4711

FAX.011-530-2549

URL <http://www.fujiprint.co.jp/>

ふるさとの土をおぼえています。

ふるさとの味や、わが家の味が忘れられないのは、なつかしい風景や、

作る人の手の温もりをいっしょに感じるからなのかもしれません。

ホクレンがお届けする農畜産物のふるさとは、さわやかな気候、きれいな空気の北の大地。

おいしいものを安心して食べたいという、あたりまえのことを何より大切にしています。

私たちは、北海道のホクレンです。

おいしい北海道、読んでみませんか？

ホクレン情報誌

GREEN



定期購読
無料

A5版サイズ
年6回(奇数月1日)発行

季節の料理メニュー、北海道産品のおいしさの秘密、産地情報や旬の素材をお届けする通販コーナーなど、おいしい情報盛りだくさんの「GREEN」を、ご応募いただいた方全員に無料でお送りいたします。

お申し込み方法

●ハガキの場合

「GREEN希望」と明記し、住所、氏名、年齢、職業、電話番号をご記入の上、次の宛先へお申し込みください。

〒060-8651

札幌市中央区北4条西1丁目3
ホクレン広報宣伝課
「GREEN」V係

●ホームページからも

<http://www.hokuren.or.jp/greenweb/>
までどうぞ。

お客様の個人情報に関しましては、厳正なる管理の上、本誌の発送のみに使用させていただきます。

- ◎ 環境と調和した「クリーン農業」を推進します。
- ◎ 産地・栽培方法などの「生産履歴」の記録に取り組みます。
- ◎ 生産工程ごとに安全確認する「HACCP」の衛生管理システムに取り組みます。
- ◎ 生産・流通経路を追跡できる「トレーサビリティシステム」に取り組みます。

おいしいも、あんしんも、北海道から。

 **ホクレン**

<http://www.hokuren.or.jp>